

平成 22 年 3 月 8 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007 年度～2008 年度
 課題番号： 19530651
 研究課題名（和文） 外国語副作用の生起プロセス

研究課題名（英文） Generation processes of the foreign language side effect

研究代表者

高野 陽太郎（TAKANO YOHTARO）
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号： 20197122

研究成果の概要：

外国語副作用（十分に習熟していない外国語を使用している際には知的能力が一時的に低下するという現象）が生じる心理的メカニズムを二重課題実験によって検討し、語彙アクセス段階では外国語副作用が生じるが、音韻検出段階では生じないという結果を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 心理学・実験心理学

キーワード： 言語

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、外国語副作用という現象を初めて実験的に立証し、理論的に説明した（Takano & Noda, 1993, 1995）。思考に内言が伴う場合にも外国語副作用は生じること、外国語副作用による思考力の低下は観察者によって検知されうることも示した。

2. 研究の目的

言語処理は、音韻認知、形態素認知、統語解析、語彙アクセス等、複数の情報処理過程から構成されている。そのうち、どの過程が思考に干渉して外国語副作用を生み出すのかを調べるのが本研究の目的であった

3. 研究の方法

実験参加者は、思考課題と言語課題を同時に行った。思考課題は、非言語性知能を測定するために知能検査で使用される問題であった。言語課題は、実験 1 では語彙性判断課題、実験 2 では音韻検出課題であった。

4. 研究成果

実験 1 では、外国語副作用が観察され、語彙アクセスと音韻認知のどちらか又は両方が思考に干渉することが判明した。実験 2 では、外国語副作用は観察されなかった。しかし、課題が容易なものであったので、音韻認知段階で外国語副作用が生じないと言えるかどうかについては、検討の余地が残る。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

高野 陽太郎 (TAKANO YOHTARO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 20197122

(2)研究分担者

(3)連携研究者